

# 四川ルズ・チベット族の婚姻慣習

## ——「西番」社会の紐帯

松 岡 正 子

はじめに

1. 冕寧県和愛郷廟頂堡の概況
2. 廟頂堡の親族集団と婚姻
3. 婚約、結婚、同居、分家のプロセス

おわりに

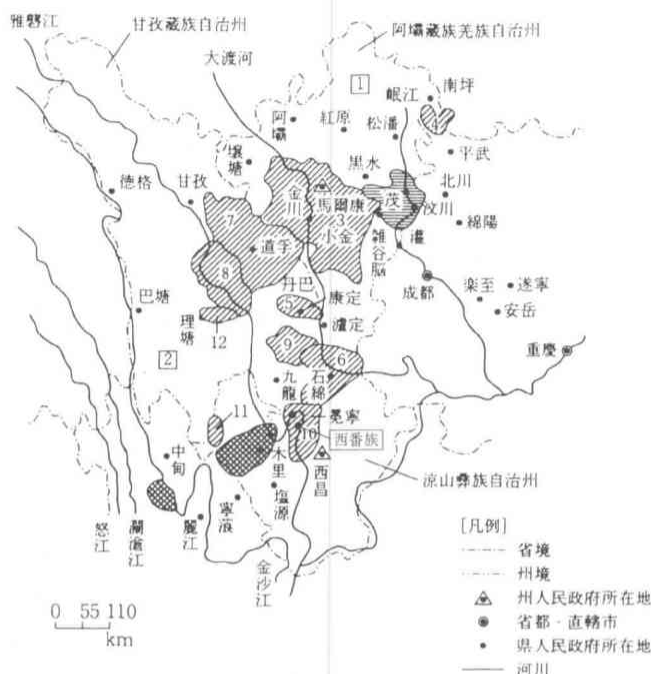
### はじめに

本稿は、四川省西南の山間部で強固な自集団意識をもって暮らし続けるルズ・チベット族について、集団の根幹を形成する婚姻慣習の視点から彼らがどのように集団を維持してきたのか分析するものである。

ルズ・チベット族（以下ルズと記す）は、四川省西部に居住する、かつて「西番<sup>(1)</sup>」と総称されたチベット族諸集団の一つである（図1）。自称をルズといい、漢語では「里汝」あるいは「呂蘇」と記す。ルズ語は、四川チベット族支系のアルス語の一つに分類される<sup>(2)</sup>。居住地は雅礕江中流域の海拔高度 3000 メートル前後の険しい峡谷地帯で、交通の不便さから改革開放後も経済的発展に出遅れた地域である。行政上は九龍県の烏拉溪郷や煙袋郷、冕寧県の和愛郷、木里県などに分布する。

「西番」とよばれた四川チベット族は、歴史的に幾つもの集団が移動や融合を繰り返した「蔵彝走廊」地区に数百年にわたってイ族や漢族と共住してきた。しかし四川チベットの各支系集団は、厳しい自然環境のなかで強い自集団意識をもって閉鎖的に生きてきたために、複数の民族が共住する地域にあっても、原則として異なる民族のみならずチベット族の他の支系と

〔図1〕 四川チベット族の分布



〔出所〕

四川省人口普查辦公室編『四川藏族人口』（中国統計出版社、1994）46頁、孫宏閣「六江流域的民族語言及其系屬分類」（『民族學報』、1983）1983・3より作成。（松岡正子『青藏高原東部の少数民族—チベット族と四川チベット族』ゆまに書房 2000年239頁より）

チベット族

1	アムド	821	7	アールゴン	45
2	カム		8	ジャバ	15
3	ギャロン	120	9	ミニヤック	15
4	白馬	12	10	ナムイ	15
5	タイリヤン	7	11	シシン	2
6	アルスー	21	12	チュ	15

チベット族

チベット族

もほとんど通婚することがなかった。

事例とした和愛郷廟頂堡は、ルズ・チベット族が最も集中し、伝来の習俗がよく残された典型的な集落としてしられており、80年代に中国西南民族学会などによって詳細な調査が実施された。筆者は2001年9月にここを訪れ、聞き取り調査を行った。改革開放後の国家の諸政策は辺境といわ

れた土地にくらす少数民族にも大きな影響を与えた。なかでも際立っているのは、出稼ぎや移住といった形態で進んだ人々の移動である。ルズ・チベット族の場合も例外ではなく、80年代に入ると人々は「豊かさ」をもとめて一齐に出稼ぎにでた。そしてこの20年余りの間に出稼ぎは長期化し、数年間ほとんど帰郷しない若者も増え、ムラの過疎化や高齢化、一家をあげての移住を促している。また一方で、人の移動は様々なモノや価値観を地元にもたらし、人々の生活環境や意識を変えている。

本稿では、ルズ・チベット族という集団を形成する要素の一つである婚姻慣習の変化を通して、改革開放後の社会の大きな変化のなかで彼らがどのような選択をしようとしたのか考察する。

## 1. 冕寧県和愛郷廟頂堡の概況

### (1) 和愛郷の概況

四川省和冕寧県瀘寧区和愛郷は、四川省西南部の雅砻江沿岸の峡谷地帯に位置する。海拔高度約1500～3500メートルで、懸崖絶壁と険しい山々によって周囲から隔絶され、沿線道路に面した臨江村以外の行政村はみな傾斜の険しい山腹に位置している。そのため現在も村に公路が通じておらず、人や物資の往来は人力や馬、騾馬で山道を数時間登るほかはない。

和愛郷<sup>(3)</sup>は、総人口2818人、総戸数652戸で、漢、チベット、イの3民族が暮らす多民族地域である。郷内は、臨江・大甲・和愛・廟頂・星火・拉姑薩の6つの行政村と27の村民小組からなる(表1)。2000年の統計では、漢族が1,724人で61.2%、チベット族が591人で21.0%、イ族が503人で17.8%を占める。1988年には少数民族が総人口の26%を超えたことから和愛藏族民族郷として認定され、郷長はチベット族から選ばれている。

3民族は、互いの言語を理解し、漢語を共通言語として日常的に往来しているが、これまで互いに婚姻関係を結ぶことはほとんどなかった。彼ら

【表1】和愛郷の概況

村名	組数	高度(m)	民族	人口(人)	農民		耕地(畝)		経済作物*	年収 <sup>†</sup> 順位
					戸数	人口	畑	水田		
臨江	4	1500	漢	373	79	333	505	79	養蚕	3
大甲	4	—	漢	513	120	427	285	210	養蚕	1
和愛	4	1900	漢	517	121	456	657	38	養蚕	2
廟頂	4	3300	藏	386	79	365	449	—	花椒	4
星火	6	—	漢, 彝	558	130	389	988	—	花椒	5
拉姑薩	5	—	藏, 彝	538	114	512	1373	—	花椒	6
総計	27			643	2482	4257	327			

<sup>†</sup>養蚕は438担, 1100張, 総生産高95527元(2000年), サンショウは28000斤, このほかクルミやリンゴを栽培。

<sup>\*</sup>郷の平均収入は1533元(2003年)。藏族や彝(イ)族は副業として貝母や天麻などの漢方薬材, 松茸を採集, 湖南や湖北, 広東に出稼ぎに行く。ヤクや綿羊を飼う。

[出所] 2001年現地での聞き取りにより作成

は原則として民族ごとに集落を形成している。漢族は, 人口の約77.8%が海拔2000m以下の臨江・大甲・和愛の3村に集中し, 最も海拔高度の高い廟頂村にはチベット族が住む。星火村はイ族と漢族が3:7で, 拉姑薩村はイ族とチベット族が1:1の割合で暮らす, 各民族は村内では小組(堡)ごとにまとまって住み分けている。

和愛郷のチベット族は, 廟頂堡のルズと烏拉堡のナムイに大別される。両者はそれぞれ固有の言語をもち, リルの言語は「新客話」, ナムイは「老客話」ともよばれる。人民共和国内以前はナムイ語が主流であったが, 次第にルズが勢力を持つようになり, ナムイ語にはかなりのリル語が含まれるようになった。元来, 風俗習慣や宗教にも違いがあったが, 長期にわたって隣接して暮らしてきたために互いに言語を理解できるだけでなく, 婚姻関係も結ぶようになった。

漢族は, 清・雍正5年(1727)に清軍が越西や冕寧一帯の西番を制圧した後に大量にこの一帯に移住してきた。和愛郷の漢族は, 四川の峨眉県や

貴州、湖北から来てほぼ6、7代、約百数十年を経ている。祖先を中原の出身とし、従軍や辺境防衛、逃亡などの理由でこの地に至り、すでに200年を経ている。イ族は最も後発の集団で、この百年余りの間に移って来た。頭人に率いられた武闘集団であり、武力によって次々と先住民から土地や人、家畜を奪った。チベット族と漢族は連携してこれに対抗したがほとんど効果がなく、一家をあげて逃亡する者が少なくなかったという。

経済的には、郷全体が河川によって沿線道路の反対側に分断されているため郷政府所在地の和愛村にさえも車の通行可能な道路が通じておらず、改革開放後の経済発展に出遅れた。郷の一人当たりの平均年収は1553元にすぎない(2000)。また山腹のチベット族、イ族の村では改革開放後に奨励された経済作物のサンショウ栽培があまり順調ではなく、収入源は出稼ぎに頼るしかない。そのため平均年収は約800元にすぎず、養蚕による現金収入をもつ麓の漢族の3村との経済的格差は少なくない。

また出稼ぎは、農閑期を利用した短期の漢方薬材採取以外に、若者の多くが広東や深圳、湖南、湖北の都市に半年からほぼ1年にわたって出て行くようになったため、山腹の村では高齢化が進んでいる。さらにこの10年余りの間に山腹の住民は次々に山を下り、河壩の臨江村や冕寧県皇城、瀘沽、西昌、札州などに移っていった。2000年までに、すでに廟頂村を中心に34戸が山の村を離れ、移住先で商店を開いたり、土地を請け負って農業をしたりしている。

## (2) 廟頂堡の概況

廟頂村は、ルズ語ではラピチジフ(洛比区覚夫)という。総戸数90戸、総人口493人(2000年)で、平均海拔高度2000メートル前後の山腹斜面に拉烏(1組)23戸・122人、羅卡(2組)18戸・78人、洛比却覚(3組)17戸・73人、廟頂(4組)32戸・130人の4つの組(堡)が点在する。拉烏の王(「孫根」)家と廟頂の伍家(「納巴と牙都」)が大姓で、これ以外は主に人民共和国内成立後に移住してきた集団である。王家(4代)と伍家(13

代以上)は通婚関係にあるが、元来は異なる支系で、前者はナムイ、後者はルズである。周辺には、ナムイは青納納約夫、ルズは拉姑沙、沙夫に居住しており、それぞれ同じ支系内で婚姻を結んできたが、近い距離に住んでいた両者はやがて通婚するようになった。

廟頂堡は、ルズ語でドツチジフ(「独次却覚夫」)という。伝承では、3人の兄弟がこの地を開き、20世紀の初めには13代を経ている。長男の納斉、次男の納巴、三男の南卡カに分かれ、さらに10数の小グループを作る。納斉(漢姓は陳)は、納斉(1戸、以下現存戸数)、莫約(7)・所多(2)・迷賭(0)・愛力(0)、納巴(漢姓は伍、9戸)は、亜瓦(1)、南卡、南卡カは、亜塔、哈米(2)、作科(1)、加都(1)、字僚(2)、尼曼(0)に分かれる。

かつて集団の秩序は、頭人会議と慣習法によって維持されてきた。頭人とは、各家庭の家長の中から選ばれた最も世代が上で最年長の族長である。頭人会議は不定期で、何か問題が起きた時に組を構成する3集団の頭人が集まって協議した。代々行われてきた慣習法(村規民約)の内容は、主に以下の3点である。

第1は山に関するもの。集落所有の山では乱伐してはならない。毎年3月6日から封山(山での伐採を禁ずる)を始める。この日はルズの最大の祭りで、山神を祀る「シプム」を行う。住民はラマとともに山上に上り、神樹の前で柏樹を燃やして山神を祀り、雹がふらないように祈る。またこの日から山で勝手に木材や竹を切り出してはならない。これを破ればその年の収穫は不調になる。違反者は収穫の損失を償わなくてはならない。金のある者は金で、無い者は井戸掘りや道路修理などの労働で償う。

第2は結婚に関するもの。ルズの習慣では幼時に父母の命令で婚約し、10代で結婚式をあげ、数年後に同居を始める。結婚対象は母方の兄弟姉妹の子供が最もよいとされた。一般に新夫婦は3月6日の山神祭りの日に組の集会で披露して同居を始める。また父母がいったん婚約を決めたら、他の異性と関係をもってはならない。

第3は治安に関するもの。窃盗の場合は、体罰、賠償、教育などの方法で改心させる。また住民の1人が外地で殺人、放火、窃盗などの事件を起こした時には、事件をおこした土地の慣習法に従って処罰を受け、さらに本人はその土地を追い出され、外地で暮らさなければならない。特に殺人の場合は、故郷の住民が金を出し合ってその土地の慣習法にのっとった命の代価を償う。

慣習法は、主に山、婚姻、治安に関するものである。このうち治安は、人民共和国成立後は慣習法を参考にしながら、原則として現行法にのっとって裁かれる。しかし山と婚姻に関する慣習法は、依然として住民にとって大きな意味をもっている。封山は生産活動に大きくかかわっており、現在も厳しく守られている。3月6日の山の神祭りは、組全体の最も重要な活動である。婚姻に関しては、第2章で詳述するように人民共和国下で婚姻法が制定、改正されたが、近年まで当地では実際の結婚は従来の婚姻慣習に従って進められた。

近年、廟頂堡が直面している大きな問題は、過疎化である。登記上は総戸数32戸であるが、実際に居住しているのは2000年で約20戸に減少している。当地は、村内で海拔高度が最も高い山頂近くの斜面に位置し、かつては外敵からの防御に優れた土地であった。しかしそれは麓からの往来が極めて不便で、将来的にも改善されにくい地形であることを意味している。そのため改革開放後の経済的発展に大きく出遅れてしまい、1990年代以降、多くの若者が西昌や成都、冕寧、木里、九龍の県城や重慶などへ出稼ぎに出るようになった。彼らの出稼ぎは、鉱山や道路工事などの肉体労働が主で、概して労働条件が劣悪で低賃金である。さらに近年は出稼ぎでまとまった金を貯めた後に経済的に好転する見込みのない廟頂を出て沿線の臨江村に移っていく者も増えている。臨江村の沿道には30戸余りの小規模商店が軒を並べているが、廟頂村からの移住者による店が最も多い。その結果、山腹の集落では空き家が増え、過疎化や高齢化が進んでいる。

## 2. 廟頂堡の親族集団と婚姻

廟頂堡には、先住の納巴家9戸、莫約家7戸、納齊家1戸と、4代を経た後発の亜都家3戸が居住する。ただし納巴の9戸のうち4戸はすでに村を離れている。以下は、2001年9月の現地調査時に廟頂堡に残っていた戸主に対して行った婚姻に関する聞き取り調査の記録である（表2）。

### (1)「納巴」

納巴は、最古の一族で、漢式の族名は伍である。伝承によれば、西藏から10の大支系とともにこの地に移って来た。現在は9戸で20数名、2人の老人が頭人としてそれぞれ亜瓦6戸と南卡3戸を率いる。各戸の家長は、亜瓦は正品（五男の息子）、正清（長男の息子）、正国（四男の息子）、玉剛（次男の息子）、正福、玉發で、南卡は徳元、徳強（ともに正品の息子）と国強である。伍正品の父（大伍と記す）には5人の息子がいたが、長男は貧困を理由に県城に移住した。次男はラマになって西藏に行った。人民共和国成立前までは、一家に3人以上の男子がいた場合はラマを1人だすのが慣例であったからである。長女は他村のルズに嫁いだ。三男の家は、息子の世代が当地にいる。四男は解放軍の兵士になって早くに村を出た。その長女は塩源県の役所で働き、次女は死亡、三女は教師になって県城にいる。「納巴」では、結婚は原則として親が相手を決める。

事例1：亜瓦の Erlunjiapin（漢名は伍正品、68歳・男性）は、大伍の五男の息子で、4人の息子と2人の娘がいる。当地の伍家では最多の家族数をもつ。長男（47歳）は、母の兄の娘（同村の拉烏堡）と幼時に婚約、16歳で結婚式をあげ、18歳から同居、3年後に分家。三男（37歳）は、母の弟の娘（同組）と14歳で婚約、16歳で式をあげ、20歳で同居し、2年後分家。4番目は長女（35歳）で、長男の妻の弟と幼時に婚約、18歳で式を行い、21歳で同居。長男と長女の結婚は、相手方も姉弟である（「換親」）。四男（33歳）は、同組の楊家の娘と10代で婚約、式をあげ、数年後に同居、



2年後に分家。次女(30歳)は、青納郷出身(ナムイ)の娘と16歳で婚約、18歳で結婚、19歳で同居した。

上記の5組は、みな80年代以降の婚姻で、最近のは90年代である。ともに幼時あるいは10代で婚約、結婚式をあげ、20代前半に同居している。祖父世代より上だけではなく、本人および子供の世代にいたるまでほとんどの結婚において、相手は親が選んできめた。このような婚姻は、以下で述べるように広く集落全体にみられる。人民共和国の婚姻法は50年代に発布され、80年代に改正されたが、廟頂のルズは結婚と離婚の自由、法定婚姻年齢などを定めた婚姻法に関係なく、現在も彼らの慣習法によって婚姻を行う。彼らによれば、婚姻法は漢族の法律なのだという。

ただしEL家にも例外がある。次男(42歳)である。次男は、20代で自ら西昌の鉄鉾山で働くことを希望して出稼ぎにいき、そこで知り合った他郷のチベット族女性と自由恋愛で結婚し、子供2人とともに西昌で暮らしている。外部にでて外との接点が多くなるとともに様々な価値観の影響をうけて、婚姻にも少しずつ変化がおきている。

事例2：伍玉剛家。伍玉剛(68歳)は、大伍の次男の息子で、50年代に村長になり、80年に退職。玉剛は60年代初め、25歳の時に同じ組の妻(72歳)と自由恋愛をへて結婚し、即同居した。父はラマであった。3人の息子のうち1人はラマになるという当時の慣例にならって、弟が生まれたときにラマになることが決まった。父の2人の姉妹も親が決めた母方の男性と結婚した。

次男の国成(38歳)は、中学卒業後、友人と村を出て商いをした。雲南の茶葉や薬草などを甘孜や麗江県等に運んで3～4倍の値で転売し利益を得た。その後、鉾山の民工隊を組織して老板になり、塩源の金鉾で働いた。99年によび戻されて村長になった。妻(34歳、同村出身)は中学時代の友人の妹で、自由恋愛を経て25歳で結婚。兄(40歳)と妹2人(36歳と32歳)は、塩源県城で公務員や商売をしている。兄(40歳)は未婚、妹たちはルズあるいはナムイの相手と自由恋愛で結婚。村に残った弟(30歳)も

自由恋愛で結婚し、両親と同居している。

事例3：王徳発家。烏拉堡出身のナムイ王某と廟頂堡のルズ伍某との結婚である。両家はすでに10代にわたって婚姻関係を結んでいる。王徳発（57歳、男性）は、66年から86年まで廟頂堡の支部書記を務めた老幹部である。王家は隣組の拉烏堡から移ってきて四代、約百年を経る。妻は舅舅（母方の兄弟）の娘である。14歳の時に瀘寧製糸工場から冕寧県文芸工作団に選ばれ、64年には四川省代表として北京で「全国少数民族彙演」で歌舞を披露、全国的に知られた歌手となる。王が19歳、妻が18歳で知り合い、婚約と結婚は同時であった。王には幼時に婚約した相手がいたが、病弱であったために王が結婚を望まず破談にした。60年代では珍しい恋愛結婚である。王が政府の幹部であったことが、婚姻法に基づく恋愛結婚を可能にしたと思われる。

長男（36歳）は、妻（35歳、5代離れた母方の娘）と5歳で婚約、19歳で結婚、20歳で同居、2年後に分家。次男（34歳）は、妻（34歳、6代離れた母方の娘）と3歳で婚約、18歳で結婚、21歳で同居、4年後に分家。三男（28歳）は、妻（27歳、6代離れた母方の娘）と20代の初めに自由恋愛、父母の同意を得て婚約と結婚は同時だった。三男には幼時に婚約した相手がいたが、女性が上級の学校に行ったために破談となった。長男、次男、三男の妻はみな母方の娘である。また長男、次男は伝統的な婚姻形態になっており、幼時に婚約、10代に結婚、1～3年後に同居している。

しかし四男（23歳）は、幼時に婚約をせず、康定の中専に進学した。現在もまだ婚約していない。五男（17歳）は小学校卒で農民であるが、まだ婚約していない。王家には、伝統的な婚姻と新しい婚姻の形がみられる。三男は、伝統的な婚姻習慣にのっとって幼時に婚約したが、相手の進学のために破談となり、最終的には自由恋愛で結婚した。このように従来の婚姻慣習の変化は1980年代初期から現れている。理由は女性側の上級学校への進学であるが、進学は、以後も変化の典型的な理由としてしばしばあげられる。さらに90年代後半からは、自由恋愛を経た本人の意思で決め

る結婚が目立ち始めた。

事例4：伍明発家。伍明発（62歳）は、黒教のシャーマン「ヘパ（黒叭）」である。彼によれば、ルズはチベットを出て四川に到達し、木里、九龍、冕寧（廟頂）に分かれて定住したが、廟頂ではすでに18代、約500年を経るという。民国時代には貧困を理由に廟頂から一部がさらに木里に移り住んだため、木里には現在も親戚がいる。妻は清那郷出身で、10代以上離れた母方の娘である。5歳（1942年）の時に両親が婚約を決め、14歳で結婚式をあげ、2年後に同居を始めた。姉2人は両親の決めた同郷の拉姑薩村と清那郷に嫁いだ。3人の息子がいる。長男（25歳の時に死亡）は、九龍県に出稼ぎに行った時に知り合ったルズと自由恋愛で結婚。次男（26歳）は幼時に婚約したが、性格があわないためまだ結婚していない。三男（20歳）は19歳の時に双方の両親が婚約を決め、本人たちも同意した。妻（18歳）は木里県保波郷出身のルズ。20歳で結婚し、同時に分家して同居。

事例5：伍明方家。伍明方（64歳、ヘパ）は、母の兄弟の娘（拉姑薩村）と幼時に婚約、20歳で結婚、23歳で同居。5女2男。長女（38歳）は巴塘人と結婚、長男（35歳）は拉姑薩村小学校の教師、妻は同村の遠い親戚で、自由恋愛で結婚した。次女（33歳）は中学校卒業後、西昌で個人商店を開き、西昌の市工商局で働くチベット人と自由恋愛で結婚。次男（30歳）は中学校卒業後、参軍、冕寧県法院で働く。未婚約。三女（28歳）は城関鎮和尚村のチベット族と自由恋愛で結婚。四女（26歳）は小学校教師、未婚約。五女（22歳）はシャングリラの歌舞団の団員。当家は、子供の世代は7人の兄弟姉妹全員が故郷を出ており、うち5人は教員や公務員、商売人で都市戸籍をもつ。子供の世代はみな自分の意思で結婚相手を選んだ。

事例6：伍応福家。伍応福（76歳、ヘパ）は、父方の姉妹の娘と51年に結婚して同時に同居。長男の妻は同組出身、次男の妻は木里県保波出身。父は母方の兄弟の娘と結婚、祖父も2代経た母方の兄弟の娘と結婚。

## (2)「莫約」

「莫約」は、7戸。父の兄弟の息子の後代である。伍新玉、学成（新の父の弟）、新林（学成の息子）、徳強（父の兄）、文甫（納斉、父の兄の息子）、文強（文甫の弟）、新福。

事例7：伍文甫家。伍文甫（37歳、小学5年まで）は、房名は納斉、文甫は母の兄の娘である妻（同組出身）と5歳で婚約、18歳で婚約、25歳で同居、5、6年後に分家。父は、父の姉の娘と結婚。2人の姉と4人の弟がいる。二弟（33歳）は3代隔たった母方の娘（30歳）と7歳で婚約、23歳で結婚、26歳で同居、4年後に分家。三弟（30歳）は母の兄の娘（32歳）と25歳で婚約、結婚と同時に同居、妻側が嫁入りを望まなかったために婿入りし、その後分家した。四弟（29歳）は未婚、参軍後に除隊し、甘孜州建委で勤務。上の姉（42歳）は清那郷の父方の遠い親戚に嫁ぎ、下の姉（40歳）は甘孜州团委に勤める。

文甫家の婚姻は、80年代に入って変わり始めた。二弟までの婚姻は、10代までに婚約、結婚後数年たってから同居、対象は母方の娘と従来の型式を踏襲しているが、改革開放後の80年代にはいって適齢期を迎えた四弟以降は、父母が主導する婚約は行っていない。文甫には13、9、7、4歳の2女2男がおり、学校に通っているが、1人も婚約していない。

事例8：伍新玉家。伍新玉（50歳）は、もと拉姑薩組の組長。妻は5代離れた母方の娘で同組出身。12歳で婚約、18歳で結婚、20歳で同居。息子2人と娘2人がいる。長男（28歳）は同組出身の妻と15歳で婚約、19歳で結婚、20歳で同居。次男（24歳）は、自由恋愛をへて23歳で結婚と同時に同居、3年後に分家。三女（20歳）は冕寧師範学校在学中で、まだ婚約していない。四女（17歳）も中学を卒業したばかりで、婚約していない。新玉の妹（40歳代）は、父母の決めた里庄のルズに嫁いだ。

文甫家は次男（24歳）から従来の結婚と違ってきている。結婚相手は親が決めるのではなく自分で選び、婚約から結婚、同居に至るまで年数をかけない。価値観の変化が本人にみられるだけではなく、親の世代もそれを

受け入れている。90年代後半以降、特に若者が外部に出る機会がふえており、若い世代は農業以外の生業手段を得て経済的にも独立できる環境になっている。次男の場合は、96年から2年間参軍して車の運転技術を習得し、帰郷後車を買ってサンショウやクルミを運んで売買し、やがて山を下りて河壩の沿線に移住した。幹線道路沿いの臨江への移住は90年代後半から増えている。山上の村への交通の不便さは容易に解決できるものではなく、住民は次々と故郷に見切りをつけて山をおりている。

### (3)「亜都」

亜都は廟頂村にきて4代、約百年を経た、後発の集団である。1組3戸（伍成国、成発、成徳）、2組2戸（成読、文章）、3組1戸（文発）、4組1戸であわせて7戸ある。

事例9：伍文発家。伍文発（49歳）は、妻（38歳）と出稼ぎ先の城関で知り合い、自由恋愛で結婚。親戚関係はない。兄（60数歳）は冕寧県里庄区に婿入りした。妻は母の兄弟の娘で、幼時に婚約。次兄（55歳）は木里俚波出身、4代離れた親戚の娘と自由恋愛。弟（43歳）は、西昌師範学校を卒業して村の小学校教師をしている。同村出身で4代離れた親戚の娘と自由恋愛。文発には16、15、13歳の3人の息子がいるが、婚約している者はいない。亜都の一族は後発グループであるためか、結婚対象をルズに限ってはいるが、代々近隣の同一集団との間で繰り返されてきた当地の婚姻慣習からは比較的自由で、結婚には本人の意思が尊重されている。

以上、2003年9月に現地で調査した54の婚姻事例は、廟頂ルズが近年までなお旧来の婚姻慣習を根強く行ってきたことを明らかにしている（表2）。ルズには、幼児に婚約、10代で結婚、数年後に同居するという婚姻慣習がある。親は子供の婚姻に対して強い決定権をもっており、本人が幼い時に父母が結婚相手を選んで婚約を交わす「開娃娃親」の慣習がある。54例のうち40例（約75%）がこのような父母の決めた結婚である。事例の最年少は33歳で、90年代初めまで旧来の婚姻形式が行われていたことが

わかる。

結婚対象の選択は、第1にルズかナムイであること。54例中2例を除いてほとんどがそうであり、集落を離れて出稼ぎに行ってもそのまま街に住むことになっても結婚対象はルズやナムイから選ぶ。そのため婚姻圏はほとんどが同組内、同村内、周辺の拉姑薩村や青納郷、あるいは少し離れた木里県保波郷や九龍県子耳郷などルズ、ナムイの居住地に集中している。

第2に妻は母方の兄弟の娘から、逆に夫は父方の姉妹の息子から優先的に選ぶ。ルズは概して経済的に豊かではなかったために、経済的・道徳的援助を時には母方の兄弟にもとめなければならなかった。母方の娘から妻を選ぶことは約20例にみられ、「老親」として代々繰り返されてきた。特に8例は舅舅（母の兄弟）の娘で、近い親類による交叉イトコ婚である。

しかし90年代に入って、若い世代のなかには従来の婚姻慣習には縛られない者が出てきた。他のチベット支系を結婚対象として自分の意思で選び、結婚即同居という形式をとる。ただし漢族など他民族との結婚は、まだ廟頂堡ではみられない。変化の背景には、若い世代が外部で稼ぐ機会を得て経済力をつけてきたこと、外部との往来が盛んになって外の情報が入り、様々な価値観を知るようになったことなどが考えられる。従来の婚姻慣習は、同一民族集団圏のなかで自給的に生存していくことを前提とし、低い経済生活のなかで母方兄弟の社会的・経済的バックアップをあてにしたものであるといえる。そのため若者が農業以外で収入を得て、活動範囲を集落以外にもつようになると旧来の慣習の意味は当然弱まっていった。ただし現在も親の意見は重視されており、その同意は必須である。しかし親自身が社会の急激な変化にもはや自分達の世代はついていけないことを感じており、次世代の考え方や行為を容認するようになっている。

### 3. 婚約、結婚、同居、分家のプロセス

#### (1) 婚約・結婚・同居のプロセスと意味

ルズの婚姻慣習では、婚約と結婚は19歳以前に行う。幼時の婚約は、家同士で従来繰り返されてきた関係を深め、相互扶助の結びつきを強めている。2003年の現地での聞き取りによれば、その大まかなプロセスは事例1のようである。

事例1：WZ（60歳代）は、幼時（1960年代）に婚約して12歳で結婚、15歳で同居した。結婚式は、まずラマが式の日時を占って決める。新婦側は娘を送り出す儀式、新郎側は新婦を迎える儀式を行う。紹介者である母の妹には、新郎側が酒10数斤と現金10数元、布を送る。紹介者が新婦を新郎側に送り届ける。新郎側は新居と生活用品を準備し、経済生活に責任をもつ。新婦側は、自分の衣服を準備する。

婚礼は3日間行われる。1日目は「送親」、新婦側が新婦を迎えに来た新郎側をもてなす。男性側の迎えは、ラマの占いにより人や日にちを決める。早朝、新郎側は馬で迎えに行く。新婦側は、到着した迎えに水をかける「洒水」儀式を行い、約束の成立を示す。新郎が部屋に入ると、新婦の両親が新郎にいくつかの難題をだす。その日は、新婦側で宴席が開かれ、親戚友人がきて歌い踊る。新郎側一行も泊まる。

2日目、ラマに経文を読んでもらい、磕頭と出発の時間を決める。一般には、新婦は朝日が昇る時に嫁ぎ先に入るになっている。出発にあたり、新婦は神に向かって磕頭し、灯かりをともし、柏香を燃やし、「尖石頭<sup>(4)</sup>」（家神）に酒をふりかけて祈る。新婦一行は、舅舅（母方の兄弟）や父の兄弟姉妹、自分の姉妹、新婦と同年齢の女友達など12人がつき従う。

新郎家に到着したら、新郎と新婦はまず初めに尖石頭に祈りをあげる。屋内に入る時には、ラマがホラ貝を吹き「ヤンク」（祝いの言葉）を唱える。主人は新婦側一行に酒をささげ、「ヤラゴジマとポジニボガ」（婚礼故事）

を語る。部屋に入ると、タンバ（5本の色違いの布）を新郎と新婦の身体にかける。男性側は宴席を準備し、夜は「跳鍋庄」をおどる。

3日目、客を送り出す。新婦はラマが選んだ日に実家にもどる。WZは3日後だった。以後、同居までの3年間、双方が行き来して互いの家の農作業を手伝う。春節時には、男性が酒や飴、豚肉、食糧などをもって妻宅を訪ねる。妻も同様に夫宅を訪れるが、贈答品は男性側が多い。

一般に、同居は男性側がまず申し出て、本人達が望み、同意してから、ラマが同居開始の日時を決める。結婚式をあげて同居するまでに、春節などの祝日にお土産をもって妻の実家を訪れ、農繁期には手伝いにいく。数年後、互いが同意したうえで男性側が同居を申し入れる。3月6日は同居開始の日とされる。この日は、村人全員がラマに念経してもらいながら山上で山の神を祀り、住民会議が行われる重要な日である。新郎は山の神祭りの時に新婦をともなつて一緒に参加し、新しい家族を山の神と集落の人々に認めてもらう。山の神祭りが終わったら妻は新郎の家に戻って、家神を祀り、同居を始める。同居開始にあたっては特に儀式はないが、親戚や友人を招いて食事を出す。同居後は、妻は正月2日目に実家にもどる。

事例2は、近年の新しい結婚式である。10代までに行う幼時期の婚約、結婚式の数年後によりやく同居するという従来の形式ではなく、結婚と同居を同時に行う。

事例2：WG（34歳）は、25歳の時に友人の妹と結婚。事前の婚約式はなかったが、新婦側の一族の許可を得て結納金を納め、4日間の婚礼を、1日目は新婦側、2～4日は新郎側で行った。

〔結納〕①「倒酒」（新婦側の一族に酒をついで、結婚への同意をえる）：一甕の酒（50～100kg）を新婦側に送り、新婦の父や兄弟、母方の兄弟に酒をつぐ。新郎の酒を受け取ることで結婚の同意を表す。

②結納金と式の日取りを決める：双方の話しあいで結納金を5000～6000元とし、結婚式の日をちをへかに決めてもらう。仲介者に結納金を持っていってもらう。結納金で新婦の衣服、耳飾りや指輪などの飾り物を



整える。結納金は新郎の収入によって新婦側から要求される。弟は 3000 元であった。

〔結婚式〕1 日目午前、新婦側で正式の結婚式「辨酒」を行う。新郎側は、早朝、新郎とその兄弟、父の姉妹の息子などの親戚 7～10 人が新婦を迎えに行く。新婦の家に入る時、同じ世代の新婦側の親戚から水をかけられる。転んだり順調に入れなかった場合、新婦側は新郎側がこの習慣を受け入れることができなかつたとみなす。昼から夜にかけて新婦の女友達が新郎側一行を酒食や歌、踊りでもてなす。

2 日目午前、新郎側の迎えは新婦およびその近い親族とともに新郎の家にもどる。途中で新郎側の接待が良くない場合は、新婦は新郎の家についた時に馬を下りないこともある。その場合には人を介して酒をささげて謝り、馬から下りてもらう。新郎の家についたら、まず 2 人で屋上の尖石を拝し、屋内でヘバが経文を唱える中で、家神を拝する。新郎側は、新婦側一行を第一日目に新婦側が行ったと同様にもてなす。

3 日目、新婦側一行を送り出すためにウシ 2 頭とヤギ 4 匹をつぶしてもてなす。その後、新婦側一行はもどる。新婦はその日から同居。4 日目、新郎家は手伝ってくれた村人および友人親戚に酒食をだして御礼する。新郎側は、式費用として約 2 万円使った。

事例 1 と 2 の違いは、前者が 1960 年代、後者が 1990 年代に行われたもので、約 30 年の時間差があること、また前者は文化大革命前で従来の結婚の事例であるのに対して、後者は市場経済を背景に変化し、新しい部分が見られることである。

最も大きく異なるのは、事例 1 が親の決めた相手と、幼児期の婚約、結婚式、数年後の同居という従来の慣習をふんでいるのに対して、事例 2 は本人どうしの意思で相手を決め、結婚後すぐに同居したこと、すなわち結婚に関わることは本人が成人に達した後に行われていることである。換言すれば、かつて 10 代の半ばから後半にかけて行われた結婚式は、結婚というよりは、むしろ一人前になったことをそれぞれの家が集団社会に公開し、

認めてもらう成人式に類した意味をもっている。そこで同居開始も3月6日の集落全体の最も重要な山神祭りの日を借りて集団に公開され、認めてもらう。結婚が個人の通過儀礼であり、また集団にどのように組みこまれていくのかを明確に示した儀礼として処理されている。

これに対して事例2の結婚は、個人における結婚の意味が明確である。すなわち結婚は、同居して後代を残すことに意味がある。よって個人の意思によって相手を選択し、結婚即同居は当然のことである。事例2においても儀礼の細部には、嫁迎え時の「洒水」や「敬酒」のように従来の形が残されている。しかし事例1と2には、結婚における個人をどのように考えるかという意味において非常に大きな変化がおきている。

## (2) 分家と親の扶養

事例1：伍正品家では、長男は結婚して3年後の78年に分家。文化大革命中であつたため家は自分で建て、生活用具一式だけを揃えた。耕地は、82年の人民公社時に男女年齢を問わず一人当たり1畝の畑が分配され、原則として配分された耕地と開墾した分を4人の息子と親で5等分した。

三男は、改革開放後の80年代後半に分家。家屋は親が住んでいたものをもらい、親は3000元でもう一軒購入し、そこに弟達とともに移った。2畝の土地、ウシ1頭と馬1匹、ヤギ10匹、ブタ1頭、生活用具を分けてもらった。家庭経済の状況は、トウモロコシ1畝で600～700斤、ジャガイモ1畝で4000～5000斤を収穫、すべて自家用。現金収入は、サンショウ50～60株を植えて年間約2000元、年に1～2か月道路工事の出稼ぎに出て1000～1500元、あわせて3000～3500元。1年間に米2000斤を消費する。ジャガイモ5斤＝米1斤、トウモロコシ1斤＝米6両で交換する。主な支出は、米や塩、茶葉などの食費、冠婚葬祭費、3人の子供の教育費がそれぞれほぼ3分の1ずつをしめる。教育費の負担はかなり大きい。

事例2：王徳洪（57歳）家には5人の息子がいる。長男（36歳、87年結婚、88年分家）、次男（34歳、88年結婚、91年分家）、三男（28歳、98年

結婚、03年分家)、四男(23歳)は康定で勉強中で農業以外の職業につく予定、五男(17歳)は小学校卒業後、農業をして親と同居。分家は兄弟均等分割が原則。王家では、長男から順に結婚して分家した。4男は村を出て都市戸籍になっている。原則として4男以外の4人の息子と親で5分割する。息子には、分家時に家屋1軒と鍋2個や食器などの生活用具を分け、末の5男が親と同居し、もとの家屋と尖石を引き継ぐ。家畜は1戸あたりヤク2頭、ラバあるいはウシ1頭、ブタ2匹、耕地は1人当たり1畝。

現在、父はヤク7頭、ラバ1頭、ウシ2頭、ブタ6頭、ヤギ6匹、畑5畝、サンショウ栽培で年間1000元。サンショウは政府の奨励政策で種苗を無償で貰い、81年から栽培。長男はヤク5頭、ヤギ4匹、ブタ1頭、畑は4畝、ヤクは乳をとり、毛でコートを作る。97年に張家河壩で小さな雑貨店を開いた。一家で故郷を離れて麓の河辺の沿線に移った。畑の農作業は父と末子の一家が行い、長男家に必要な分だけ渡して、後は親が取る。次男はヤク7頭、ラバ1頭、ブタ6頭、畑7畝、毎年4～6月の2か月間漢方薬材やキノコ類をとりに行く。3男は分家したばかりで畑6畝。

畑では、トウモロコシとジャガイモをほぼ半々で栽培する。食事は、農閑期は1日2食、朝食は酥油茶と糌粑(コムギとチンクー麦、燕麦で作る)、夕食はトウモロコシ飯かソバ(あるいはトウモロコシ)馍馍、ジャガイモとカボチャ、四季豆を煮込んだものなど。

事例3：伍明発(62歳)家には3人の息子がいたが、長男は死亡し、妻は再婚。次男(26歳)は婚約したが性格があわず、未婚のまま親と同居。出稼ぎにはいっておらず、現金収入はサンショウ50斤を売って約450元。3男(20歳)は、20歳で結婚し、同時に分家、耕地は次男と3男に5畝ずつ、ヤクとヤギは分けず、3男にはさらにブタ4頭とウシ2頭を分けた。分家のための家屋は経済的理由で用意できず、親の家の2間を与えた。

事例4：伍新玉(50歳)家には、息子2人と娘2人がいる。長男(28歳)は結婚後3年たった2000年に分家、家屋と耕地3畝、ラバ1頭とブタ1頭、ヤギ2匹をもらったが、ムラを出て張家河壩にすみ、車を買ってサンショ

ウやクルミを売買。家畜はすべて売り、畑は親に委託。次男（24歳）は、16から18歳まで新疆の汽車兵団に配属された後、帰郷して車を買ひ、兄と同様の商売をした。結婚してすぐに分家。耕地4畝、ラバ1頭、ブタ3頭、ヤギ10匹、サンショウ40元（約500元）をもらった。新車を買ってさらに商売する予定。

事例5：伍新洪家は、2女4男。財産は4人の兄弟と親で分けるが、4男は参軍後に甘孜州建委で仕事をしているため分割しなかった。耕地は3畝ずつ、3男は女性側が嫁入りを望まなかったために畑のみ分割して婿入りした。家畜は均等にブタ1頭とヤギ2匹ずつを分けた。長男（37歳）は、現在、畑6畝、ラバ1頭、ヤク2頭、ブタ12頭、ヤギ11匹を所有し、サンショウ30斤を収穫して約500元、農閑期には友人と九龍県に出稼ぎに行き、虫草などの漢方薬材やキノコ類を採取して2004年は約1000元の収入があった。しかし昨年はほとんど収入がなかった。

事例6：伍玉剛（68歳、もと村長）家は、3男2女。2人の妹（36、32歳）と長男（40歳）は塩源县で働いている。財産は親と次男（38歳）、3男（30歳）で分けた。耕地は1戸あたり3畝、次男は中学卒業後に金鉱で働き、雲南にいて商売した。村によびもどされて母屋の横に家屋を建て、分家した。ヤク5頭とブタ4頭をもち、サンショウで約1500元、村長の給料が年に600元、商売の収入もある。経済状況は組内でも豊かなほうで、家畜は不要だという。

以上、分家については、兄弟による財産の均等分割、末子が親と同居するという従来の慣習がほぼそのまま続けられている。しかし集落を出て街に定住するようになった者については、分配していない。財産の細かい分割は経済水準の低下を意味するし、街に出たものにとって山間の財産はほとんど価値がないからである。

分家の儀式は、一族の年長者や親戚が並び、さらに集落（組）の各戸から男性の代表が1人ずつ参列する。組の全戸が分家の立ち会い人になることで、財産を均等に分配したという保証を与え、新しい家庭の独立と集落

集団への参加を認める。分割するものは、畑や家畜以外に、親の家で使っていたイロリの五徳やカマドは末子にあたえ、長子以下の分家する者にはそれに相当するモノを与える。親戚は炊事道具や生産道具、あるいは現金を贈る。親は習慣上では末子と暮らす、夫と妻がそれぞれ好きな子供の家を選んで、分かれて同居することもある。あるいは親だけで暮らす。その場合は、重い労働は同組に住む息子が代わり、軽い労働は親が自分でできなくなったら同組に住む息子の嫁や実の娘が行う。農作業は、息子達が自分の畑の作業を終えてから一緒に親の農作業を行う。親の扶養は、原則として息子が平等に負担する。

近年、老親の役割はとても重い。孫の世話の手伝いは昔から老人の役目であったが、最近、男親だけではなく女親もともに麓や街に出稼ぎにいたり、長期に家を空けて外地で働くことが増えており、子供達は祖父母に育てられている例が少なくない。

## おわりに

ルズ・チベット族は、ナムイ・チベット族とともに「西番」意識を強くもち続けているために、漢族やイ族などの異なる民族だけではなく、チベット族内の他の支系とも婚姻関係を結ぶことがほとんどなかった。彼らはルズやナムイという同支系集団内で婚姻を繰り返すことで集団を支える強い紐帯をつくりあげてきた。そのため結婚は原則として親が決め、最もよいのは兄弟の息子あるいは娘と姉妹の息子あるいは娘の結婚であるとされた。また2組の兄弟姉妹による「換親」もしばしば行われた。現在も子供が幼い時あるいは10歳代のうちに親が婚約をとり決め、20歳になる前に結婚式をあげ、2～3年後に同居を始めるという慣習が続けられている。

ルズ・チベット族の典型的な集落である廟頂堡では、このような従来の婚姻慣習が根強く行われてきた。2001年の調査でとりあげた70歳代から10歳代までの54の婚姻事例では、ほとんどがルズあるいはナムイどうし

の婚姻であり、30歳代の結婚にも旧来の婚姻形式がみられた。しかし90年代にはいって若者が出稼ぎや進学、兵士になるなどの理由で恒常的に外地に出かけるようになると、婚姻慣習も大きく変わってきた。

結婚の対象を同じルズあるいはナムイにもとめる傾向は依然として根強いが、出稼ぎ先で知り合った他のチベット族も対象とされるようになった。またすでに多くのルズが移住という形を通して麓の村で漢族やイ族と共住しており、今後、他民族との結婚が出現するのも時間の問題ではないかと思われる。さらにかつては生存のために婚姻による社会的経済的な強い紐帯を必要とした集落生活も、近年は外部で現金収入を得るようになり、個人を単位とした動きも多くなった。またこのような変化は、外地で異なる情報を知ることの多い若者が影響をうけただけでなく親の世代にも変化がでている。40歳代の親の世代は親の意志で決める幼時の婚約を行わなくなっており、今後は個人の意思を尊重した婚姻が主流になっていくだろう。

しかしそれは従来の婚姻慣習が担っていた集団の紐帯としての機能が弱まることでもある。過疎化が進み、密であった人間関係も少しづつ希薄になりつつある中で、廟頂のルズは新たな紐帯を何にもとめようとしているのか。経済的に成功したもと村長の長男を外地からよびもどして新村長に迎えたことは、彼らが集団の新たなキーワードとして「経済」を選択したことを示すものであろう。

#### 〔注〕

- (1) 「西番」は、藏彝走廊の先住の民であり、ナムイの伝承では冕寧に来てすでに千年以上を経る。7世紀頃から吐蕃に支配され、チベット仏教を受け入れて「チベット化」した。しかし明清時代には土司制のもとで中国王朝の間接支配を受け、18世紀の改土帰流後は漢族の商人の往来も増え、漢族との接触も恒常化した。19世紀末からはイ族がこの地に進出し、武力によって先住の西番や漢族を脅かした。人民共和国成立後には、「西番」集団の多くが民族識別によって西番の名称をチベット族に改めた〔松岡、2006a：222～223〕。
- (2) アルス語は、東部、中部、西部の3つの方言区に分類され、西部方言区は

さらに呷爾と里汝（ルズ）の2つの土語に分けられる。ルズ語についてはまだ調査が十分ではなく、研究者の間でも諸説がある〔池田 2002:105～107〕。近年通婚するようになったナムイとは言語的にかなり異なるとされるが、和愛郷ではナムイ語にルズ語がかなりとり入れられているという。

- (3) 郷人民政府は和愛村にあり、郷内には、完全小学校が和愛と拉姑に1箇所ずつ、5つの村営小学校、衛生院がある。2000年の統計では、全郷では、教師24人、児童約400人で、小学校の卒業率100%、中学校（泸寧区）への入学率98%であるが、高校は県城にしかない。1年2学期制で、1学期の雑費は1人あたり10元（すべて現地での聞き取りによる）。
- (4) 「尖石頭」は、家神を象徴する。神棚、家屋の屋上に安置する。山奥の人跡未踏の地から採ってきて、ヘイパが作る。代々、親が管理し、死後は親と同居していた息子、一般には末子が受け継ぐ。原則として本来の家屋から持ち出さない。結婚式では初めにまず屋上の石を祀る。石は地上に生えていることから、その石を手の中に置くことは世界の万事万物をつかんだことを表す。尖石頭は、リル語で「shibajio」、人類の始祖を表す。山を越える時、山上のマニ堆の尖石に経文を唱えて祈る。何か行方時には必ず祈る。祈りには、酒、鶏の血や毛、五穀を之に撒き、香をたき、磕頭し、経文を唱える。

#### 〔参考文献〕

- 池田巧（2003）「西南中国〈川西民族走廊〉地域の言語分布」『消滅の危機に瀕した言語の研究の現状と課題』国立民族学博物館調査報告39 63～114頁
- 陳明芳・王志良・劉夜旭（1982）「冕寧県和愛公社廟頂地区藏族社会歴史調査」『雅砻江下遊考察報告』75～105頁
- 陳明芳（1988）「四川冕寧県廟頂藏族的原始宗教調査」『四川民族史志』1998年第3期
- 四川省冕寧県地方志編纂委員会編纂（1994）『冕寧県志』四川人民出版社
- 松岡正子（2006a）「川西南の西番における民族識別（2）——西番族の歴史の記憶」『紀要』127号 221～237頁
- （2006b）「改革開放後のヒトの移動と変化の諸相——四川省のナムイ・チベット族を事例として」『現代中国学の課題と展望——改革・変革と社会・文化の変容～過去と現在～』（愛知大学21世紀COEプログラム国際シンポジウム予稿集）

楊 光甸 (1982)『涼山州冕寧県瀘寧区藏族調査筆記』西南民族学院民族研究所

〔表2〕廟頂堡の婚姻状況

本人					相手 (妻または夫)			出身地	形式	婚約 (歳)	結婚 (歳)	同居 (歳)	分家 (年)	備考
名前	年齢	関係	学歴	職業	名前	年齢	関係							
伍正品	68				王成珍		舅舅 <sup>a</sup> の娘	木里・ 保波	父母					
伍納巴		父						木里・ 保波	父母					
伍德元	47	長男			王海英	42	舅舅の 娘	昭烏達	父母	幼	16	18	3	
伍德尧	42	二男		打工(西昌)	羅振紅	40		惠安	自由					
伍德林	37	三男			王文芬	36	舅舅の 娘	〔本籍〕	父母	14	16	20	2	
伍德芬	35	長女			王国金	38	舅舅の 息子	昭烏達	父母	幼	18	21		
伍德強	33	四男			楊英宗	30		〔本籍〕	父母				2	
伍三呷	30	二女			王德強	33		青納	父母	16	18	19		親と同居
伍扎西	60代								父母	幼	12	15		
伍玉剛	68			もと村長	王正芬			〔本籍〕	自由	×	25			
伍国成	38	二男	中学	商売'99か ら村長	唐文秀	34	友人の 妹	〔本籍〕	自由	25	25			
伍懿	36	長女	中学	塩源公務員	楊昌華	36	母方	〔本籍〕	父母					
伍静	32	次女		塩源県商売			母方	〔本籍〕	父母					
伍兵	30	三男			趙潤英	30		〔本籍〕	自由	22				
王德洪	57			もと村書記	伍正芬	58	母方	〔本籍〕	父母	5	19	20		
王明強	36	長男	中学		伍成芬	35	母方	〔本籍〕	父母	3	18	21	2	
王明剛	34	二男	中学		伍国芬	34	母方	〔本籍〕	自由 (父母)				4	
王明福	28	三男	小学		伍国珍	27	母方	〔本籍〕	父母+ 双方					親と同居
王明金	23	四男	康定 藏文											
王明伍	17	五男	小学											
伍明尧	62			ベノ <sup>a</sup>			母方	青納	父母	5	14	16		



四川ルズ・チベット族の婚姻慣習

		姉					拉姑薩	父母					
		姉					青納	父母					
伍金福		長男					九龍	自由					出稼ぎ先
伍金強	26	次男							幼	×			
伍金堯	20	三男			18		木里・ 保波	父母+ 双方	19	20	20		親と同居
伍明方	64		ベバ			舅舅の 娘	拉姑薩	父母	幼	20	23		
	38	長女					巴塘	自由					
伍金友	35	長男		王新秀	38	母方	拉姑薩	自由					
	33	二女	中学	西昌で商売	日戸	34	西昌	自由					
伍金強	30	二男	中学	冤寧県法院					×				
	28	三女	×		馬宝	27		自由					藏族
	26	四女		小学校教師					×				
	22	五女		芸術団員					×				香格里拉
伍応福	76		ベバ		70	舅舅の 娘	本細	父母					
	49	長男	小学	ベバ	49	舅舅の 娘	本細	父母	幼	24	24		
	36	二男	小学	九龍で商売	34		木里・ 保波	父母					
伍文甫	37		小学		唐德珍		本細	父母	5	18	25	5~6	
伍新洪					唐文珍		本細	父母					
伍文強	33				趙明英		本細	父母	7	23	26	4	
伍文凱	30				唐車麗		本細	父母	25	25	25		婿入り
伍澤仁	29			甘孜州建委									
伍文芬	42						青納	父母					
伍文秀	40			甘孜州团委				自由					
伍新玉	50			もと拉姑薩 小学校長	王德芬	母方	本細	父母	12	18	20		
伍小強	28	長男	小学		趙先芝		本細	父母	15	19	20	6	
伍小平	24	二男		運送業	王海寿			自由		23	23	3	参軍
伍小梅	20	長女	冤寧師 範						×				

伍小娘	17	二女	中学							×				
		妹					冤寧里 庄	父母						
伍文発	49		小学			38	城関	自由						出稼ぎ
	60	長兄					舅舅の 娘	冤寧里 庄		幼				
	49	二兄					母方	木里・ 保波	父母					
	43	三兄	西昌師 範	小学校教師			母方		自由					婿入り

〔注〕

- i 形式の「父母」は親が決めた結婚, 「自由」は本人同士の自由恋愛で決めた結婚
- ii 「同居」は結婚式を挙げた後, 一緒にくらしはじめるまでの年数
- iii 「舅舅」は母の兄弟
- iv 本村は廟頂村内の組, 本組は廟頂堡, □は村内婚
- v 「幼」は幼い時に婚約
- vi 「ペパ」はシャーマン

〔出所〕 2001年現地での聞き取りにより作成